

福祉文教委員会

福祉文教委員会では、デジタル技術の活用等により不登校児童・生徒に多様な学びの機会を確保し、社会的自立につなげる施策について研究することを目的として、「不登校児童・生徒の支援策について」を所管事務調査事項としている。青梅市の不登校の現状と取組について教育委員会から説明を受け調査を行っているが、さらに調査を進めるに当たり、先進地の不登校児童・生徒の支援の取組について行政視察を実施する必要があると判断し、今回、デジタル技術を活用した不登校児童・生徒の支援事業を行っている北海道帯広市の視察を実施した。

視 察 地 北海道帯広市

視察期間 令和7年10月14日（火）～15日（水）

視察事項 「ひろびろチョイス」を中心とした不登校児童・生徒の支援策について

参 加 者 （委員長）湖城 宣子（副委員長）迫田 晃樹

（委 員）山田 紀之、井上 たかし、片谷 洋夫

鴨居 たかやす、久保 富弘、野島 資雄

（随 行…和久井庶務係長）

1 帯広市について

帯広市は、令和7年4月30日現在の人口が159,988人、面積は東京23区と同規模の619.34km²である。広大な十勝平野の中央部に位置し、市域のうち市街地となっている部分は約16.5%で、基幹産業である畑作・酪農の農村地帯が大部分を占めている。農業が盛んな地域ならではの娯楽として、古くから農耕馬による力比べなどが行われてきたこともあり、世界で唯一の「ばんえい競馬」を単独で開催している。

2 不登校児童・生徒の支援に関する取組について

帯広市では、市内の小・中学校および義務教育学校に在籍し、主に心理的要因や集団不適応等によって、不登校の状態にある児童・生徒を対象として、対面形式で支援を受けられる「教育支援センターひろびろ」とオンラインで支援を受けられる「ひろびろチョイス」の2つの事業を実施し、児童・生徒の状況に応じて必要な支援が行えるよう取り組んでいる。

（1）教育支援センターひろびろ

通所型の支援施設であり、令和5年度から「適応指導教室ひろびろ」から「教育支援センターひろびろ」に名称変更した。学校に在籍したまま通うことができ、教育支援センターひろびろを利用した日は出席扱いとなる。

ア 利用時間

午前10時から午後3時までの間、好きな時間に来所し帰宅することができ

る。

イ 学習内容

来所した児童・生徒は次のような学びを行う。

- (ア) 自ら計画した学習計画にもとづいた学習活動
- (イ) 自然体験学習や馬に触れる体験活動
- (ウ) 図書館を利用した読書活動
- (エ) スポーツセンター等で体を動かす活動

ウ 指導員

2名の指導員が一人一人の状況に応じた支援を行っている。



教育委員会担当職員から説明を受ける委員

(2) ひろびろチョイス

ア 実施の背景

不登校児童生徒が増加傾向にあり、これまで教育支援センターひろびろを実施し支援を行ってきたが、立地上の課題があり、誰でも支援が受けられる体制が求められていた。不登校が将来引きこもりにつながることから多様な支援が求められる中で、文部科学省から不登校児童・生徒の社会的自立が図られるよう自宅においてＩＣＴを活用した学習活動で要件を満たせば出席扱いになり、評価ができることが示された。さらにＧＩＧＡスクール構想により1人1台の端末整備が進んだこともあり、令和5年5月からデジタル技術を活用した仮想空間（メタバース）内にひろびろチョイスを開設した。システムの構築に当たっては、地元の企業やフリースクールに協力を依頼した。

イ 目的

オンラインを活用した学習支援や体験活動等を通して、多様な学びの機会を確保し、学校復帰や社会的自立につなげていく。

ウ コンセプト

3つのCをコンセプトとしている。

Choice～選べる～ Connect～つながる～ Cheer～応援する～
自分で学びを選び、人とつながる、未来とつながる。そんなワクワクする

場を地域の大人で応援する。

エ 利用状況

令和6年度登録者数 126名

退会48名（卒業30名、学校復帰10名、その他の理由8名程度）

令和7年6月現在 83名

オ 概要

(ア) 操作方法

自分の分身となるアバターを作成し、ログインするとすると様々なスペースが設けられた広い図書館のような空間に入る。入口には相談員2名（専属1名、教育支援センターひろびろと兼任1名）がおり、出席確認と今日の学びの確認を行う。ひろびろチョイス内を自由に移動できる。

(イ) ひろびろチョイス内のスペース

ひろびろチョイス内には様々なスペースが設けられており、自ら学びを選択して自由に利用することができる。

ひとりスペース	1人でじっくり学ぶスペース、ミーティングアイコンなし
わいわいスペース	参加者同士でつながって学ぶスペース、ミーティングアイコンあり
かいけつスペース	分からぬことを相談員や参加者と一緒に解決するスペース
電子図書館	帯広市図書館の電子書籍を読んだり借りることができる。
帯広市教育研究所作成コンテンツ	音楽アプリ等を使用することができる。
そうだんルーム	相談員への相談スペース、鍵がかか安心して相談ができる。
ボードゲームスペース	参加者がつながるスペース
作品コーナー	参加者が作成した作品を展示し見ることができる。
すくさぽコーナー	地元のフリースクールがZOOMで学びを提供する。
カレンダー	様々な活動の申込みができる。
スタディサプリ	任意で選択することができ、習熟度に応じた学習を選べる。(年間6,600円)

(ウ) 時間割

1日3校時で構成され、午前10時から午後2時15分まで好きな時間に入退室できる。

10:00～10:15	おはよータイム	相談員が出席状況の確認、健康観察、1日の過ごし方を確認
10:15～11:00 11:15～12:00	個別チョイス	自分のやりたい学びを自分で選んで一人一人のペースで学習を行う。教科書やAIドリルで勉強、電子図書館での「調べ学習」、オンラインの良さを活かして他の参加者に聞いたり、一緒につながって学習することもできる。

12:00～13:00	ランチタイム	離席をして各自で昼食、フリースペースで他の参加者と会話しながら食べることもできる。
13:15～14:00	サポチョイス（月、水）	地元のフリースクールがZOOMで学習支援を実施
	クラブチョイス（火）	eスポーツやクッキングなど、自然体験、オンラインとリアルの両方で活動
	遠足チョイス（木（月1回程度））	帯広・十勝の様々な人に会ったり、場所へ行ったり体験活動を行う。
	わくわくトークチョイス（金（不定期））	帯広市教育委員会の指導主事が得意分野を活かして利用者と関わる参加型イベントを実施
14:15	またねタイム	1日の活動の振り返り今後の予定の確認をする。

カ 保護者への確認

お互いに気持ちよく利用するために保護者と個人情報の保護や著作権についての同意を得ている。

キ 出席扱いと学習の評価

文部科学省の7要件をもとにし、学校での判断が難しくならないように教育委員会がガイドラインを作成し支援している。

ク メンター制度の試行

登録者の増加に伴い、伴走支援を充実させるためメンター制度の導入について試行している。年上のお兄さん、お姉さんのような立ち位置で子どもと接しながらひろびろチョイスの学びを促すなど伴走者として支援を行う。ひろびろチョイス内で週に1回15分程度個別面談等を実施している。

ケ 利用者アンケート結果

出席扱いになることをメリットに感じている児童・生徒が最も多い。

(3) その他の支援

文部科学省が令和4年12月に改定した生徒指導提要、「支える」生徒指導の理念にもとづき進めてきた。いじめ問題など各分野の専門家による教員研修を実施した。各校に校内支援センターの設置が進んでおり、組織的な不登校支援の充実、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、心の教育相談員を配置している。児童・生徒会と連携し、こどもサミットを実施した。

帯広市における特色ある取組の1つで、中学校区を基盤とした幼保、小中一貫の取組、エリアファミリー構想を活かした取組を行い、自治意識の向上、風土の醸成から新たな不登校を生まない取組みを進めている。

3 視察を終えて

帯広市が不登校児童・生徒の増加と市域が広いという立地上の課題を抱える中で、当時は都道府県や政令指定市しか実施していなかったデジタル技術を利用した不登

校支援策の導入に踏み切ったのは大きな決断であったと思われる。システムの構築に当たっては、他の自治体が採用していた外部委託を行わず、帯広市全体で不登校児童・生徒を応援し支援するため、地元の企業やフリースクール等の関係団体の協力を得て完成させたとのことであり、地域全体で子どもたちを応援しようとする住民の絆の強さを感じた。

ひろびろチョイスには様々な学びのスペースが設けられており、利用者が自ら選択することができ、電子図書館を利用したり友達とゲームで遊ぶこともできるようになっており、メタバース上に学校での活動を再現している。メタバース上で実際にアバターがどのように動いて展開していくのかを動画で見ることはできなかったが、場面ごとの写真で子どもたちが学習している様子を自分なりに想像することができた。また、ひろびろチョイスにはオンライン上の活動だけでなく、保護者も参加可能な外での体験学習のメニューもあり、年間を通じて多種多様な企画を実施している。外出を促すきっかけにもなり、様々な人と交流することで社会的に孤立させないための有効な手段であり、地域の活性化にもつながるものと感じた。令和6年度はひろびろチョイスの利用者のうち10名が学校に復帰できるなど、大きな成果を上げており、利用者からも好評であるとのことであった。担当者からの説明の中で、不登校児童・生徒の支援の目的が必ずしも学校へ復帰することではなく、社会的自立につなげていくことであるという話が特に印象的であった。

青梅市においては、現時点ではデジタル技術を活用した不登校支援策の導入の検討はされていないとのことであるが、有効な施策であることから、児童・生徒に配付されている端末を利用し、メタバースに限らず何らかの形で不登校支援への活用を検討する必要があると感じた。委員会としても市および教育委員会に提言できるよう、今後も引き続き調査、研究を行っていきたい。

(福祉文教委員長 湖城 宣子)



帯広市役所にて